

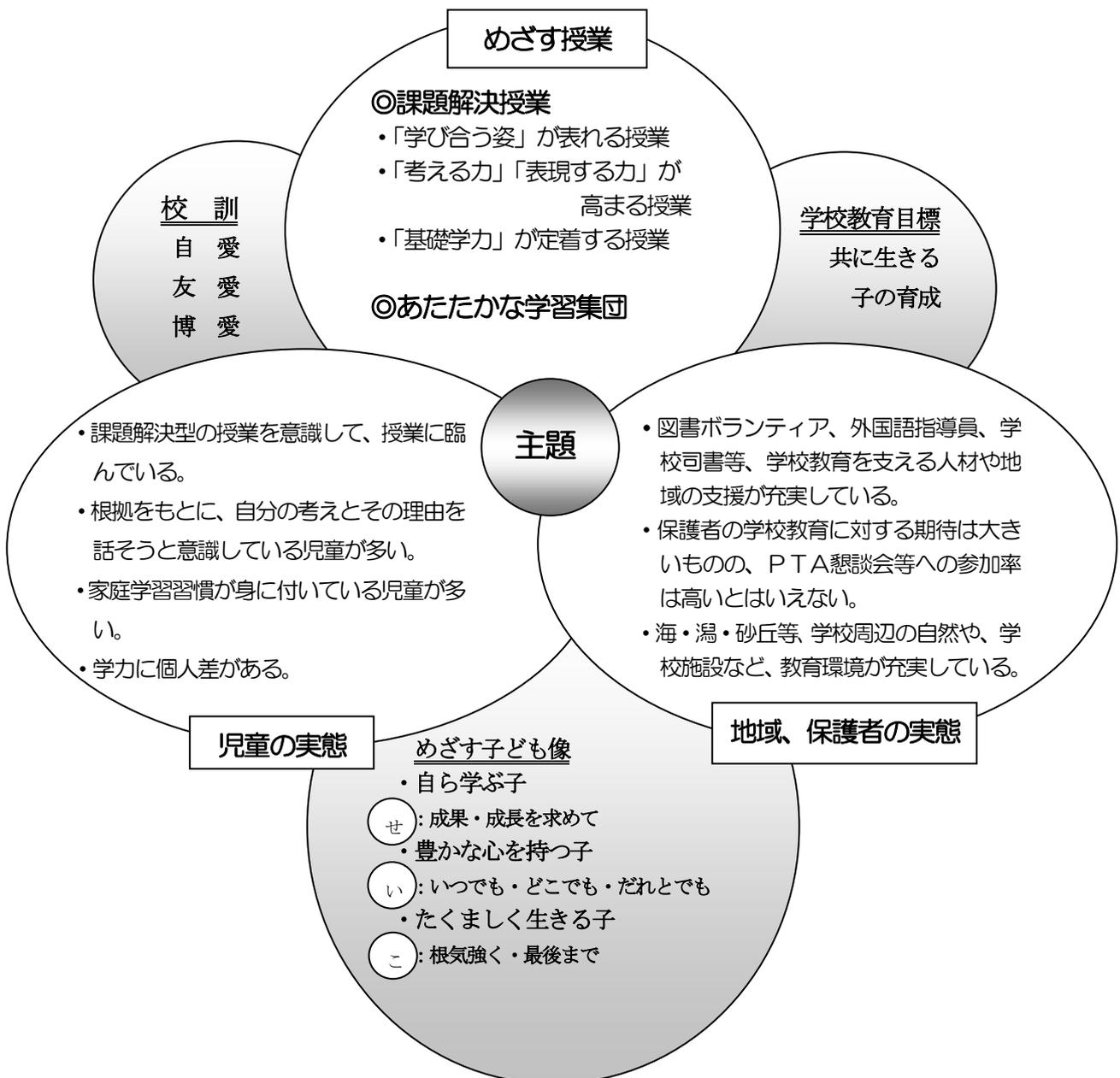
令和3年度 内灘町立清湖小学校 研究概要

1. 研究主題

自ら考え、学び合う子をめざして

～「わかった、できた」と実感できる授業づくり～

2. 研究主題・副題設定の理由



本校が考える「自ら考え、学び合う子」とは、

「自ら考える子」…課題を見出し、既習事項やこれまでの経験を活かして、
課題の解決や達成に向けて考える子
「学び合う子」…考えたことを表現し合い、認め合うことで、
学びを深め、「わかった、できた」と実感できる子

である。このような学びへの姿勢・能力を、これからの時代を生きる子ども達、一人一人に獲得させたい。

本校では、令和2年度から研究主題を「自ら考え、学び合う子をめざして」とし、副題は、平成30年度から【「わかった、できた」と実感できる授業づくり】として、授業実践を積み重ねてきた。

より充実した共通実践を行うために、下記の3つの重点

重点①「問題意識が高まる課題づくり」

重点②「根拠をもとに筋道を立てて考えを表現させる指導の工夫」

重点③【「わかった、できた」を実感するための場の設定】

を設けることで、児童一人一人が友達と学び合い、全員が「わかった、できた」と実感できるように研究に取り組んできた。特に、令和2年度は、重点②で児童同士の学び合いを意識し、重点③で全員が「わかった、できた」と実感できるように取り組み、実践を積み重ねた。その成果として、以下の点が挙げられる。

(1) 問題意識が高まる課題づくり

どの教科でも、付けたい力を明確にして児童にゴールの姿を示すことで、何を学ぶのか、何のための学習かという児童の学習への目的意識を高めることができた。その際、「どんなゴールの姿を示せば、より問題意識を高めることができるのか」、「導入をコンパクトにして問題意識を高めることで、後半の充実につながる」等、問題意識のより効果的な高め方についても明らかになった。

(2) 根拠をもとに筋道を立てて考えを表現させる指導の工夫

全体解決の中で、「考え・根拠・理由」を明らかにして、モデルとなる表現を用いて話す・書く場を設け、指導と評価を繰り返すことで、根拠をもとに考えを表現する児童が増え、個の伸びも見られるようになった。学び合う姿にせまるために、「学び合い名人」に児童から出た良い反応を書き込み、日常的に使うことで、友達の考えに反応して学び合う姿も見られるようになってきた。

(3) 「わかった、できた」を実感するための場の設定

ねらいに合わせて何を振り返らせるのか、どんな問題を解かせるのか考えることで、児童は課題について「わかった、できた」を振り返ることができた。また、教師の授業評価にもつながった。

以上のことが成果として挙げられるが、根拠をもとに考えを表現して解決できたことを全員で共有する場を設け、そこでの学びをいかした振り返りの場を設定が十分ではなかった。そのため、「学び合い」による考えの深まりや良さに気付かせ、全員が「わかった、できた」と実感できる場の設定を充実させることが課題である。

そこで、今年度も研究主題・副題は継続し、教師も児童も学び合いの中で課題解決をすることを強く意識し、学び合いの中でねらいとする「見方・考え方」をつけていく。そのために、本時でどのような考え方を身に付ければよいのかを意識し、全体解決の中で再思考させ、終末に個で解決する場を設けることで、主題に迫っていきたい。

3. 研究の仮説

授業者が、児童の問題意識が高まるゴールの姿や問題の提示、発問を行うことで、児童は自ら課題を見出し、考えの根拠、理由を話し合い、互いに認め合う中で学びを深め、「わかった、できた」と実感できるだろう。このように実感する児童は、学び合いの良さに気付き、新たな課題について「自ら考え、学び合う力」をつけていくだろう。

4. 研究の重点と具体的な取組

今年度も「わかった、できた」と実感させるために、以下の三点について取り組むが、特に重点②を意識して研究を進めていく。

(1) 問題意識が高まる課題づくり

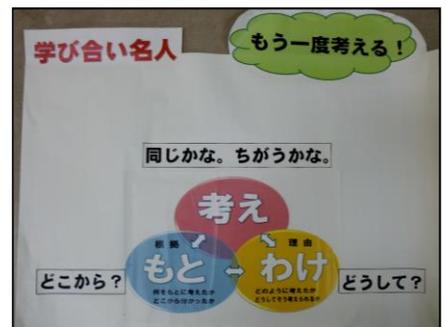
- ・付きたい力を明確にして児童にゴールの姿を示すことで、何を学ぶのか、何のための学習かという目的意識を高め、児童と単元計画を共有する。
- ・課題は、多様な思考ができるもの、根拠や筋道が明確に表現できるもの、思考を深めることができるようなものにする。

付きたい力を明確にし、その力を付けるための学習課題や言語活動を設定する。付きたい力は、既習と比較したり、一つ上の学年を意識させたりする。単元のゴールの姿として、実物を見せたり、モデルを示したりする。これらは、児童の興味関心のあるもの、少しレベルの高いもの等ダブルパクト（コンパクトとインパクト）で問題意識を高める。また、毎時間児童の「なぜだろう?」「どうすればできるようになるのかな?」等の思いを引き出し、児童の思いを全体に広げたり、挙手させたりして、全体でその思いに対して「確かにそうだな。」「~かもしれないな。」等、問題意識を共有する。こうすることで、児童一人一人の問題意識を高め、課題に対して学び合えるようにしていきたい。

(2) 根拠をもとに筋道を立てて考えを表現させる指導の工夫【令和3年度 重点】

- ・児童に表出させたい「考え・根拠・理由」をとらえ、再思考の場の活動を明確にする。
- ・表現をする際には、昨年度に引き続き「学び合い名人」を活用した指導を充実させ、学び合う姿に迫る。
「話し方」…「考え・根拠・理由」を明確にさせる指導を行う。
「聞き方」…学び合うための聞き方の視点をもたせる指導を行う。

考えを書く、話す時は、何をもとにして考えたのか「根拠」を示し、そこからなぜそう考えられるのか「理由」を表現させることが必要である。このことが「なるほど!」「確かにそうだな。」「そう考えればできるな。」という納得感を生む。しかし、児童の発言は考えや思いはあるが、それを言葉でうまく表現できず、根拠や理由が不足しているものが多い。そこで、何を根拠、理由として考えさせ、ねらいにせまっていくのかを授業者が明確にして授業に臨むことで、児童の発言の不足している部分を発問や問い返しによって表現させることができる。聞き手は、話し手の考えに対して、自分の考えと比較しながら共通点や違いを見出したり、考えの意図をとらえたりして、受け止めながら聞かせたい。聞くことが学び合う姿につながっていくと考える。そして、全員が思考し続け、学び合いによる考えの深まりに気付かせるために、再思考する場を計画的に位置づけ、もう一度全員に自分の考えを表現させる（話す・書く）。その際、学び合いの中で「わかった、できた」という経験を価値付けることで、学び合いによる良さも実感できるだろう。このような授業の経験を積み重ねることが、一人一人の根拠をもとに筋道立てて考えを表現する力につながると考える。



(3) 「わかった、できた」を実感するための場の設定

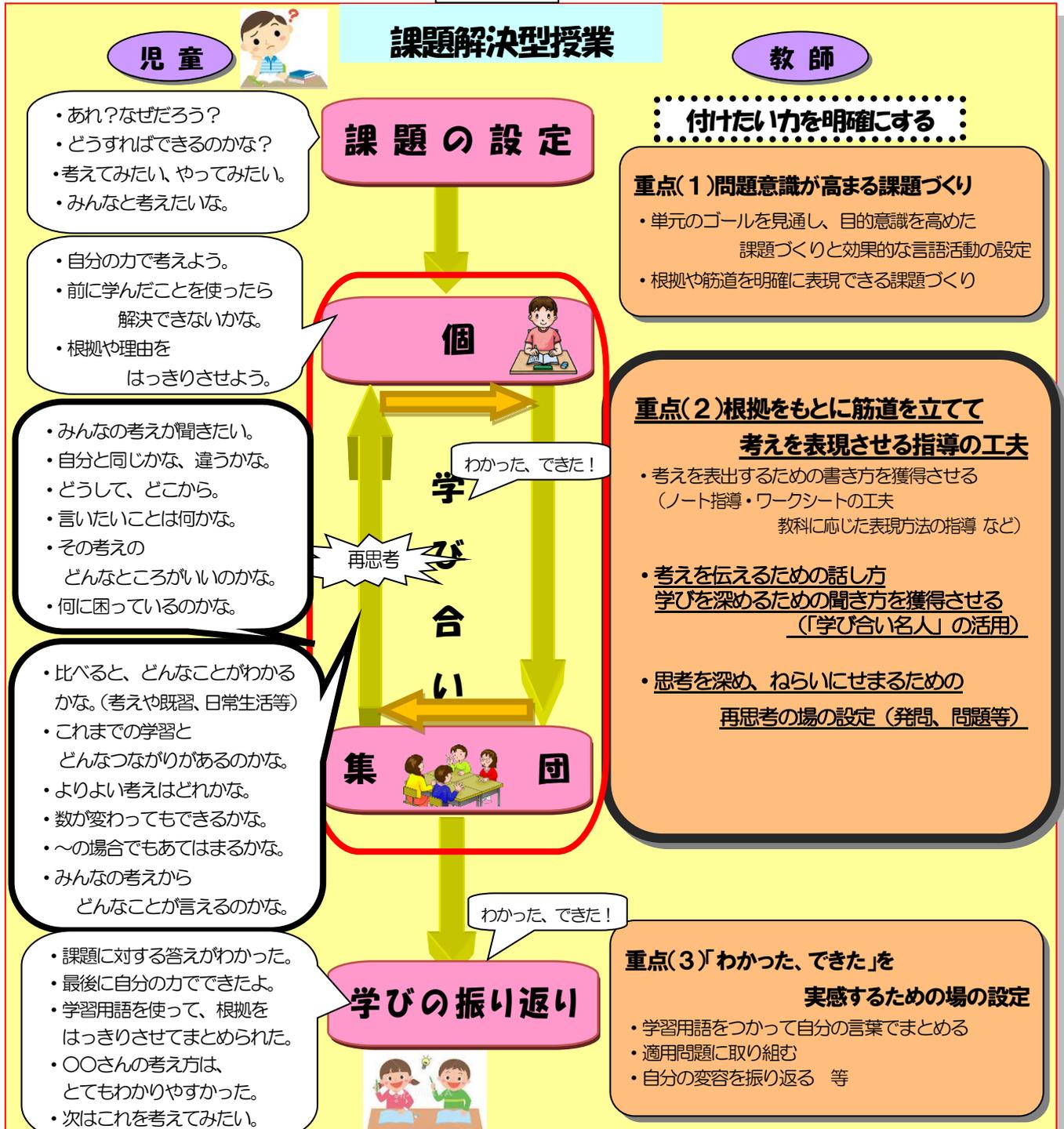
- ・ねらいに合わせて、どんな力をどのように評価するのかを明確しておく。
- ・学んだことを個で活用する場の設定（問題を解く、まとめる、振り返る）

ねらいにせまるために、どんな力をどのように評価するのかを考えて、実践する。課題について個で考え、それを学び合いを通して解決し、その学びを活用して個で解決する場を設けることで、児童に「わかった、できた」と実感させ、教師は一人一人の児童が「わかったか、できたか」を評価する。

5. 研究構想図

自ら考え、学び合う子をめざして

学び合う力



基礎基本の学力の定着

学習習慣の育成・基本的な生活習慣

あたたかな学校・学年・学級集団